

普通の人ではない床次先生

堀内 弘之 (鉱物学教室)

床次先生と云えば先生を知る多くの人は皆、普通の人ではないと云う印象をもっているだろう。この普通ではないところが、すなわち、先生の教育・研究に対する情熱なのであると私は思っている。先生ご自身は、そのようなことに全くとん着いておられないから、その情熱を永い間、自然体で後進の指導や研究仲間との議論に注いでこられた。学内外の研究会などにおいては、遙か彼方からでも先生の存在を確認できるくらい、内容や研究態度に問題があればなりふり構わず納得いくまで激しく議論するというのが床次先生のやり方であるが、終わった後の団欒や翌日には感情的なものは一切残さず、かえって、親密さを覚えるというのが誰もが感じるところである。とくに巣立って行った学生諸氏は良く鍛えて頂いたものだと年と共に先生と親しくなっていくのである。大学というところは、自己中心的な人間の集った社会であるように私は思うが、このような社会にあって、先生ご自身はご自分の利害など全く意識していないという現代では稀な方であるから、そのような意識をもって対応する普通の人間にはコワイ存在なのである。

私が大学院の最終学年に在籍し機会ある度に就職運動をしていた頃、私を阪大産研に拾って下さったのが当時の床次先生であった。就職運動をすることは今にしてみれば当たり前のことである

が、当時にしてみれば、偉い先生方のご意向に従って職を得ていた風潮もあり、独自に職探しをしていたという事が一種の activity の高さであると評価して下さったようである。幾星霜経て、再び私が先生のもとで教育・研究に従事することとなって以来9年を経て、この度、先生は早くもご退官の時を迎えるという事になってしまったが、先生の生きざまは、30年前に先生とはじめて面識を得て以来全く変わっておられず、普通の人ではない研究指導を進めてこられた。今は、大いにいじめられたなァと感じた諸氏も、将来、先生のご指導を懐かしく思い出すことが多いだろう。東大の現職を離れられても、まだまだ、これからも同学の先輩として共同で研究を進めたり、学生共々ご教示を仰ぐことも多いと思うので、ここに送る言葉を書くということは私にとって不本意なことである。多年にわたり、研究・教育上のご指導を頂き、また、スケートやアルコールに至るまでお付き合いをさせて頂いたが、今振り返ってみると、先生をお使いした事ばかりで、先生に使われたという思いが全くないのが不思議である。このような先生が研究室から去られるという事は、人生で一つの区切りをつけるという意味ではやむを得ない事とは云え、誠に残念である。現職としての東大を離れられてからも、今まで同様にご指導をお願い申し上げます次第です。